

INTERVIEW

留萌市立病院 院長
高橋文彦先生



総合診療医を育成し、 留萌の地域医療を守る。

聞き手：山田隆司 地域医療研究所長

北海道の自治医大卒業生として

山田隆司(聞き手) 今日留萌市立病院を訪問しました。先日地域医療振興協会(以下、協会)内の会議の折に高橋文彦先生がこの院長に就任されてご活躍されていることを知りましたので、ぜひお話を伺いたいと思い今回訪問させていただきました。お話をお伺いする前にまず、先生のご経歴を紹介していただけますか。

高橋文彦 私は1990年に自治医科大学を卒業しました。13期です。当時、北海道では旭川医科大学が唯一の研修病院で、卒業生は皆旭川医大の医局に入局して初期研修をすることになっていましたので、第一内科という、循環器と呼吸器を主に担当する教室に入りました。循環器や呼吸

器に興味があったのと、将来のへき地勤務を意識して救急が一番近い内科ということで選択しました。

山田 初期研修の時期から入局したのですね。

高橋 はい。当時はストレート研修の時代でしたが、自治医大の研修医だけは多科ローテーション研修が認められました。3年目には名寄市立総合病院の内科に派遣され、病棟主治医として多くの患者さんを診療することができ、よい経験になりました。そこでは消化器のトレーニングもしました。

4～5年目はへき地勤務で、当時の道立静内病院に派遣になりました。1年後に静内町に移

管することが決まっています、内科系のプライマリ・ケアを学びながら町への病院移管のお手伝いをしました。

山田 そこはどのぐらいの大きさの病院だったのですか。

高橋 80床でしたが入院患者さんは少なかったです。

山田 4年目、5年目がいわゆる道のへき地派遣だったわけですね。

高橋 はい。そして6～7年目が後期研修で、旭川医大病院の循環器の中堅として病棟主治医、検査、外来を担当しました。この時リサーチの手ほどきも受け、2年後に学位を取得することができました。

8～9年目がへき地勤務で、道立羽幌病院に派遣されました。羽幌町には2つの離島があるのですが私は焼尻島の焼尻診療所と羽幌病院を兼務しました。2年間で半年ずつ、通算1年勤務したことになります。義務年限の中では思い出深い、貴重な経験だったと思っています。

山田 焼尻島の人口はどのぐらいですか。

高橋 当時は400人くらいですね。今はもう200人を切っています。

山田 今もそこには卒業生が派遣されているのですか。

高橋 いえ、その何年かだけの道のモデル事業で卒業生が派遣されたのですが、続いてはいません。

山田 なるほど。それで義務が終わったのですね。

高橋 はい。義務が終わって旭川医大に戻り、診療をしながら研修医を指導するような立場になりました。

山田 自治医大の卒業生は全員旭川医大で初期研修をするわけだから、自治医大の後輩のほとんどを教えるというような形だったのですか。

高橋 そうですね。自治医大の後輩で第一内科に入局する後輩も割と多かったですね。大学も人手不足で心エコーチームのリーダーを3年ほど務めました。指導医といいながら実際には研修医と一緒に学んでいるような感じでした。

卒後臨床研修制度の影響を受ける地域病院

高橋 大学には5年間いましたが、やはり地域で幅広くやりたいという気持ちがあり、一方大学も医師不足だったのでこのまま大学にいることになるのかなと思っていたところ、北海道から声がかかって道立釧路病院を経由して道立羽幌病院に赴任することになりました。道立釧路病院は公立病院の統廃合政策によって、市立釧路総合病院に移管されることがすでに決まっていたのです。その対応に当たり、赴任して10ヵ月で釧路病院は閉院しました。そして羽幌病院が

新築移転する直前の2005年4月に、副院長として赴任しました。道立静内病院で指導を受けた6期の阿部昌彦先生が副院長でいらっしゃいました。

当時の羽幌病院は医師が最大11人おり、整形、外科の全麻手術やお産もやっていましたし、もちろん小児科医もいました。内科は阿部先生を筆頭に5人いて、充実していました。ところが卒後臨床研修制度の影響を受けて大学医局が撤退してしまい、全麻手術もお産もできなくなり、